

# 身延山大学における学生の意識（Ⅰ）

高 橋 一 公

## はじめに

身延山大学は平成7年に文部省（現文部科学省）4年制大学として短期大学からの改組転換の認可を受け現在に至っている。仏教学部のみ単科大学であり、さらに4年制大学としてはその規模は日本で最も小さいことから、在学生の学校生活に関する意識も独自のものがあると考えられる。今回は本格的な意識調査に取り掛かるための予備調査として位置づけにおいて実施した。

## 大学生の意識

一般的に青年期において重要な課題とされるものがErikson, E.H.のいう自我同一性の獲得であるといわれている。大学時代はその同一性の獲得において重要な経験を与えてくれる段階であり、その獲得における試行錯誤の時代ともいえる。また、社会的な責任や義務を社会人ほど課せられることもなく、社会的に許容される範囲が広いともいえる。しかし、近年では社会的価値観の多様化による同一性の獲得の延長や、社会性の発達が未熟な青年の存在が知られるようになり大学生の意識の変化が問題にされるようになってきている。

中里ら（1997）は現代日本の若者の特徴を国際比較の中から検討し、日本の若者の問題点として親子関係、価値観、人間関係の3つをあげている。彼らの研究ではその対象を中学生・高校生としているが、その危機的な状況に早くから警鐘を鳴らしている。このようななかで今日では大学生にもこの危機的な状況が伝播し、大学生の意識が問題にされている。大学生としてのモラルの低下、

モラトリアムの延長、アイデンティティの拡散など様々な社会的な問題や心理的問題を呈している。

身延山大学は広く社会にその門戸を開放したとはいえその入学者の多くには一定の志向性が強く見られる大学と考えられている。多くの学生が日蓮宗僧侶の道を選択するなかで「大学生」としての意識はどのような傾向が見られるのか、今回は学生へのアンケートを通して予備的な検討を試みる。

## 方法

調査対象 身延山大学に在学学生47名（男性41名 女性6名 回収率51%）

調査方法 身延山大学の状況にあわせて新たに作成した53問を「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法によって回答を求めた。質問項目は「入学動機」「卒業後の進路」「学校生活」「友人関係」「教員との関係」「授業の難易度」「家族関係」から構成されている。

調査時期 平成14年10月～11月

## 結果と考察

### 1. 対象者の属性について（フェイスシート）

#### 1) 学年

学年の構成比は表1-1のとおりである。2年生の場合在学学生数自体の少なさも回収率も低調であった。また4年生についてはアンケート用紙の配布がいきわたらなかったこともあり回収率も低くなってしまった。

表1-1 学年

学年	度数	相対度数
1	16	0.3404
2	5	0.1064
3	16	0.3404
4	10	0.2128
合計	47	1.0000

2) 進路志望

表1-2 進路志望

進路志望については「一般企業」「僧侶」「その他」の選択肢を用意した。その結果は表1-2のとおりである。当然のことながら僧侶志望が全体の約60%を占めている。しかし約20%の学生が一般企業を志望しており進路選択の多様性が垣間見られる。

進路	度数	相対度数
一般企業	9	0.1915
僧侶	29	0.6170
その他	7	0.1489
無回答	2	0.0426
合計	47	1.0000

3) 実家

表1-3 実家

身延山大学の場合、自家の形態が他大学と比較して特殊な形態を示していると思われるため、「寺院」「結社」「教会」「在家（一般家庭）」という選択肢を用意した。その結果は表1-3の通りである。寺院師弟が多いと考えられている身延山大学だが今回の対象者の

実家	度数	相対度数
寺院	14	0.2979
一般家庭	31	0.6596
結社	2	0.0426
合計	47	1.0000

データでは結社を含めて寺院出身者は全体の30%程度であるが、一般家庭（在家）の出身者が65%以上を占めている。

4) 居住形態

表1-4 居住形態

居住形態とは学生の現時点での住居の種類を指している。ここでは「自宅」「アパート」「寮」「坊」「寺院」「その他」という選択肢を用意した。その結果は表1-4の通りである。アパートなどから通う学生が全体の約38%を占めている。また寮（行学寮および本院寮）と寺院、坊を合わせるとこれも約38%を占

住居	度数	相対度数
自宅	8	0.1702
アパート	18	0.3830
寮	13	0.2766
寺院	2	0.0426
坊	3	0.0638
その他	3	0.0638
合計	47	1.0000

めている。入学者の志向性の多様性から居住形態も多様化の様相が見られる。

5) 信仰の有無

ここで言う「信仰」とはおおよそ「日蓮宗」に対する信仰を想定している。選択肢は「有」「無」とし、さらに有の場合は「日蓮宗」「その他」の確認を行った（表1-5および表1-6参照）。信仰の有無については約60%が信仰を認めているが、3割を超える者が信仰を持たないことも示された。また信仰を持つもののうち6割が「日蓮宗」をその対象としているが、解答の仕方に不明瞭な点があったのか35%を超える者が無回答であった。

表1-5 信仰の有無

信仰	度数	相対度数
有	28	0.5957
無	17	0.3617
無回答	2	0.0426
合計	47	1.0000

表1-6 宗派

宗派	度数	相対度数
日蓮宗	17	0.6071
その他	1	0.0357
無回答	10	0.3571
合計	28	1.0000

6) 通学時間

表1-7 通学時間

通学時間は実際の通学時間を記入してもらいその平均を求めた。レンジは1分～2時間30分と広く、身延山大学の立地条件を反映していると思われる。通学時間平均は24.71分（標準偏差＝34.31）である。通学時間の分布については表1-7の通りであり、30分以内の通学者が75%を超えている。ただし、通学方法についてはここでは回答を得ていないため、必ずしも物理的距離が近いとは言いがたい。また90分以上の通学時間を要する学生も8%以上認められる。

通学時間(分)	度数	相対度数
0-9	19	0.4130
10-19	12	0.2609
20-29	4	0.0870
30-39	2	0.0435
40-49	0	0.0000
50-59	1	0.0217
60-69	1	0.0217
70-79	3	0.0652
80-89	0	0.0000
90-99	2	0.0435
100-109	0	0.0000
110-119	0	0.0000
120-129	1	0.0217
130-139	0	0.0000
140-149	0	0.0000
150以上	1	0.0217
合計	47	1.0000

7) 兄弟の有無

表1-3 実家

兄弟の有無はただ単に確認するにとどめた。その結果は表1-8の通りである。約90%に兄弟があることが示されている。

兄弟	度数	相対度数
有	43	0.9149
無	4	0.0851
合計	47	1.0000

2. 学校生活

学校生活については「入学動機」「卒業後の進路」「学校生活」「授業の難易度」「教員との関係」「親との関係」「友人との関係」が前述のとおり設定されている。評定では「あてはまる」を"1"、「ややあてはまる」を"2"、「どちらともいえない」を"3"、「あまりあてはまらな」を"4"、「あてはまらな」を"5"と数量化し分析を試みた（該当項目に対して評定値が低い方が肯定的な態度を示す）。任意に設定した項目あるいは下位カテゴリーの詳細な検討が要求されるところではあるが、今回は予備調査における中間報告的な意味合いから多変量解析等の手法を用いた分析には言及せずに基礎統計量からのアプローチを試みた。

1) 入学動機

「入学動機」に関する質問項目は身延山大学の状況を特に加味して12項目が任意に設定されている。下位カテゴリーとして「目的ある入学」「他者の薦め」「安易な動機」を設けた。その結果が表2-1および図1-1である。

身延山大学における学生の意識（Ⅰ）（高橋）

表2-1 入学動機の平均値・標準偏差

項 目	平均値	標準偏差
仏教の勉強をするためにこの大学を選んだ	2.2553191	1.5103712
仏像修復の勉強をするためにこの大学を選んだ	3.8478261	1.3327897
就職率がいいから本大学に入学した	4.106383	1.1653334
僧階を取るため本大学に入学した	2.7234043	1.8142207
自分の将来を考えて本大学に入学した	2.0425532	1.3344507
両親に勧められて本大学に入学した	3.2340426	1.4921937
高等学校の先生から勧められて本大学に入学した	3.9148936	1.4866038
師僧に勧められて本大学に入学した	3.3191489	1.6165769
既に本校に進学することが決まっていたから本大学に入学した	2.9148936	1.5993176
通学が楽だから本大学に入学した	4.2978723	1.2143149
なんとなく本大学に入学した	3.7021277	1.3659667
学力のレベルが自分にあったから本大学に入学した	3.4255319	1.3472142

「入学動機」においては「自分の将来を考えて本学に入学した」「仏教の勉強をするためのこの大学を選んだ」という項目において肯定的な意見態度を持つ傾向にあり、在学生においてはこれが大きな入学動機になっていることがうかがえる。それに対して「他者からの薦め」に分類される「高等学校の先生に・・・」「師僧に・・・」「両親に・・・」はさほど入学動機としては働いていないことが評定値から伺うことができる。さらに「なんとなく本学に入学した」という無目的な入学動機を持つ者も少ないのが特徴といえる。

また、特徴的なものとして「就職率がいいから本大学に入学した」「通学が楽だから本大学に入学した」の2項目が挙げられる。正負両方の意味で本学の特徴ともいえるこの項目が入学動機から大きく外れていることは入学者の本学に対する志向性がはっきりしていることを意味づけるものと考えられる。「仏像修復」に対しては現状ではその志向性が高い学生が少数であることから分析の対象としては不適切な評定となってしまう。

## 2) 卒業の進路

「卒業後の進路」については具体的な質問項目ではなく、将来対する「自信」や「不安」という視点から3項目を設定した。その結果が表2-2および図1-1のとおりである。

表2-2 卒業後の進路

項 目	平均値	標準偏差
卒業後、自分の希望している就職先や進学先へ進む自信がある	2.7021277	1.3337573
将来、自分の学習したことを生かした職業に就く自信がある	2.5319149	1.3163035
将来どのような進路を歩むのか不安である	2.6382979	1.465925

「卒業後の進路」においては「将来、自分の学習したことを生かした職業に就く自信がある」に対して肯定的な態度を示している傾向が見られる。身延山大学は仏教学部のみ単科大学であり、僧侶を目指すものが多いことがこのような傾向を示す要因になったと考えられる。しかしその反面、「将来どのような進路を歩むのか不安である」と考えている傾向もあり、大学生の精神的な両価性を反映していると考えられる。

## 3) 大学生生活

「大学生生活」については5項目が設定されている。結果は表2-3および図1-2に示すとおりである。

表2-3 大学生生活

項 目	平均値	標準偏差
行事は楽しい	2.2340426	1.1269961
学校で友人に会うことが楽しみだ	2.1702128	1.1290463
自分の力を発揮する場が学校にある	3.1702128	1.1096249
大学に来るのが楽しい	2.4680851	1.1199974
校風が気に入っている	2.9361702	1.111291
大学生生活に満足している	2.7021277	1.1212356

身延山大学における学生の意識（Ⅰ）（高橋）

「大学生生活」においては「行事が楽しい」「学校で友人に会うことが楽しみだ」「大学に来るのが楽しい」に肯定的な意見態度を示している傾向が見られる。特に「楽しい」という言葉に共通性を持つこれらの項目に代表されるように、身延山大学においても他大学同様に大学が単に教育的な側面を担うのではなく、友人との接触、情報交換など学生の生活の場としての一側面を担う多くの機能を持つ現れと考えられる。また、フェイスシートの「居住形態」において、多くの学生が親元を離れて大学近辺に生活の場を持っていることを示していることと関連づけて考えると、大学が新たな友人関係を構築する上で重要な役割を担っていることも確認できるものとなっている。

4) 授業の難易度

「授業の難易度」は大学の授業に対して在学生在がどのような印象を持っているかを中心にしたもので、8項目で構成されている。結果は表2-4およびに図1-2のとおりである。

表2-4 授業の難易度

項 目	平均値	標準偏差
実習の授業は積極的に取り組める	2.2608696	0.9760415
十分に基礎的な授業が成されていない	2.9148936	1.1577675
専門性が高すぎる	2.5744681	1.0372346
専門科目の授業がわかりづらい	2.4893617	0.929524
教養科目の授業がわかりづらい	3.4468085	0.7462518
勉強はおもしろい	2.5319149	1.1199974
授業はよくわかる	2.7446809	0.8200765
本校を卒業することは、容易である	3.000	1.2158375

「授業の難易度」においては、「実習の授業は積極的に取り組める」「専門性が高すぎる」「専門科目の授業がわかりづらい」「教養科目の授業がわかりづらい」「勉強はおもしろい」などに特徴的な傾向が見られた。特に「実習の授業は積極的に取り組める」には肯定的な傾向が強く、実習授業が学生に評価され



ていることが示されている。その反面「専門性が高すぎる」「専門科目の授業がわかりづらい」においては、これを肯定する意見態度が強くなっている。これらは学生の専門科目への率直な意見として重要な意味を持つものと考えられるが、一般的に言われている現代の学生の「考えること」への弱さを示しているとも考えられる。また、「教養科目の授業がわかりづらい」に対しては否定的であり、「勉強は面白い」「授業はよくわかる」という傾向も示していることは専門科目のそれと相反しており、学生の専門科目に対する「構え」の存在を示唆している。

### 5) 教員との関係

「教員との関係」は10項目から構成されている。身延山大学の学生と教員との関係を具体的に示す内容のものが多く、結果は表2-5および図1-3のとおりである。

表2-5 教員との関係

項 目	平均値	標準偏差
親しみを感じる先生がいる	1.6382979	0.8950475
悩み事があると先生に相談する	3.5319149	1.1199974
先生は自分の話しを最後まできちんと聞いてくれる	2.000	0.9293204
先生と気軽に話すことができる	2.0425532	0.8836054
勉強で分からないことがあると、先生に質問をする	2.3829787	1.0744704
先生はいつでも相談に乗ってくれる	2.3617021	1.030524
先生と話すのが楽しい	2.1702128	1.0069141
両親には話せないことでも、先生には話せる	3.7021277	0.9761257
将来の進路について、先生に相談する	3.0217391	1.3079098
大学の先生を尊敬している	2.000	1.0425721

「教員との関係」は2つの特徴を示していることが窺える。「悩み事があると先生に相談する」「両親には話せないことでも、先生には話せる」については否定的な傾向を示している。これは教員が個人的な事柄での相談相手とは認

## 身延山大学における学生の意識（I）（高橋）

知されていないことを意味しており、プライベートな部分における心理的な距離を示していると考えられる。一方、「親しみを感じる先生がいる」「先生は自分の話しを最後まできちんと聞いてくれる」「先生と気軽に話すことができる」「大学の先生を尊敬している」などは肯定的な傾向をかなり強く示している。これらは大学内における学生と教員の距離の近さを示すものと考えられ、比較的コミュニケーションが良好であることを示していると考えられる。公私の分離が見られるものの学生が、大学の教員を尊敬の対象としながらも親しみを感じるなど身近な存在として捉えられていることは、少人数制を前提とした身延山大学の特徴によるところが大きいと思われる。

### 6) 親との関係

「親との関係」は8項目から構成されている。ここで言う「親との関係」とは大学生生活（特に学業・進路について）における情報交換と相互理解に関する項目から構成されている。一般的な通念で言う「親子関係」とは異なった視点となっている。結果は表2-6および図1-3のとおりである。

表2-6 親子関係

項 目	平均値	標準偏差
親は、私が勉強に自信が持てるように励ましてくれる	2.4680851	1.195118
親は私の学校の成績に関心がある	2.5217391	1.1876986
親に好かれていると思う	2.2765957	1.1171028
親は私の勉強について関心を持っている	2.4042553	1.0562356
親は私の卒業後の進路に関心がある	1.8085106	0.9240341
卒業後の進路について親と話すことがある	1.893617	1.1079563
学校の勉強の内容について、親と話すことがある	2.7234043	1.2632279
親のことが好きである	1.9361702	1.0714528

「親との関係」においては限定的な範囲に言及したものとはいえ、総じて肯定的な意見態度が示されている。特に「親は私の卒業後の進路に関心がある」「卒業後の進路について親と話すことがある」など卒業後の進路についての項

## 身延山大学における学生の意識（I）（高橋）

目にその傾向が強く見られる。この進路に関する親との関係性と、今回の調査で6割以上の学生が僧侶を希望していることを加味して考えてみると、身延山大学において卒業後の進路については親の影響性の強さや親の理解が不可欠のものと考えることができる。さらに「学業」に対しても同様な傾向がみられ、学業生活における親側の関心の高さが示されているといってもよい。

非常に興味深い項目に「親のことが好きである」があげられる。一般的に青年期（一般的な大学生の年齢では青年後期といえる）では親に対しては中性的な感情から否定的な方向へ傾くのが一般的であると考えられるが、身延山大学ではかなり肯定的なとらえかたがなされている。アイデンティティの獲得とも大きく関与していると考えられるが親子関係の良好さを示すものとも考えられる。さらにこの部分については詳細な分析が必要であることは言うまでもない。

### 7) 友人との関係

「友人との関係」は6項目から構成されている。「友人との関係」の質問項目は6項目と少なく、現代の大学生の持つ友人関係の特徴を網羅するものではない。結果は表2-7および図1-3のとおりである。

表2-7 友人との関係

項 目	平均値	標準偏差
友人と一緒に勉強することがある	3.2978723	1.349958
友人に自分の悩みを相談することがある	2.5106383	1.3652893
友人とよくゲームなどして遊ぶ	3.0638298	1.4356373
友人と就職などについて話すことがある	2.1914894	1.2621289
友人とよくショッピングに行く	3.2553191	1.3588372
卒業後も大学での友人関係は維持できる	2.2765957	1.2458998
学校の勉強の内容について、親と話すことがある	2.7234043	1.2632279

「友人との関係」においては、「友人に自分の悩みを相談することがある」「友人と就職などについて話すことがある」「卒業後も大学での友人関係は維持できる」などの項目に肯定的な回答が示されている。それに対して「友人と一

緒に勉強することがある」「友人とよくゲームなどして遊ぶ」「友人とよくショッピングに行く」は中立から否定的な回答が示されている。現代の若者は対人関係が希薄であると言われているなかで、身延山大学においては「その瞬間の行動を共にする」という友人関係より「信頼を基に永続する」友人関係を望んでいることが垣間見られる。

#### 8) 全体を通して

単純集計の結果のみで調査結果を示すことは当然危険なことである。平均値をはじめとする代表値はその集団の特徴を示す重要な指標として使用されるが、その代表値の裏に隠された意味をも読み取らねばならない。行動計量学的な視点を持ってすれば今回のアプローチは単にデータ処理の初めの一步を記したものに過ぎないことを念頭に置かなければならないであろう。

さて、今回は身延山大学の学生を対象に調査を行ったが、様々な点で特徴的と思われる結果が示されている。調査対象母集団が少ない上に回収率も50%強と有効データの数に問題がないわけではないが、身延山大学の学生の意識を知る上では重要なものが含まれていると考えられる。そのひとつに身延山大学に通う学生がどのような志向性を持っているかという問題である。近年身延山大学への入学者が低迷しているなかで、身延山大学に入学を志す者ははっきりと入学後、あるいは大学卒業後のビジョンを持っており、大学の選択にもそれははっきり現れているとあってよいであろう。また、授業に対して「難しい」と考えている反面「おもしろい」と回答している傾向も、学生の志向性を考えれば理解ができる傾向として捉えられる。

さらに対人関係面においては興味深いものがいくつか見られている。特に教員との関係が予想を超えて良好であるという点については注目に値する。現代の若者の特徴として対人関係に垣根がなく、誰に対しても「友達感覚」ということが一般的に言われている。しかし、身延山大学においては教員を尊敬の対象とした上で接しやすさを示していることを考えると一般的な通念からは離れ

たところでの良好な関係性が存在していると考えてよいであろう。極論すれば学生と教員のこの関係性が前述した学生の授業への態度に影響しているのかもしれない。

親や友人との関係も特徴的である。親子関係から考察できるものとして次のことがあげられる。多くの学生は「僧侶」を目指しており、早期に自分のとるべき道を選択していることがうかがえる。これはMarcia,J.Eいうアイデンティティの「早期完了」ともいえ、比較的幼少のときから将来自分のあるべき姿を親の姿を通して獲得していた可能性が考えられる。特に寺院の子弟の場合はその傾向が強いために親との関係が比較的良好であるように思われる。また、友人関係においても一般的な大学生と比較して生活環境などから行動を共にする時間が長い（寮生活や自発的な学習活動）ため、表面的な関係よりも心理的な関係が深まりやすく、そして学生もそれを望んでいるのではないかと考えられる。

## ま と め

繰り返すようだが、単純集計だけでは調査の分析は十分とはいえない。しかし今回の分析は、身延山大学の学生の意識を理解するための第一歩としては重要な意味を持つと確信している。学生の志向性、学生の持つ対人意識など目新しいものだけではないが計量的に示すことによって今後の調査の可能性を高めたといつて過言ではないであろう。なお、今後の展開として本データの更なる分析を進めるとともに、他大学学生との比較にも将来的に着手していきたい。

## 追 記

本データは平成14年度ゼミナールⅠおよびⅡ（高橋ゼミ）を通して調査されたものであり、調査票の作成および集計にはゼミ生の中西豪、兒玉翼の両君の協力が大きいことを付記する。

参考文献

- 藤沢伸介 2002 大学生の授業評価における観点の推移 日本心理学会第66回大会  
抄録集
- 堀洋道 山本真理子 松井豊（編）1994 心理尺度ファイル 垣内出版
- 無藤隆 高橋恵子 田島元信（編）1990 発達心理学Ⅱ 青年・成人・老人 東京  
大学出版会
- 中里至正 松井洋 編著 1997 異質な日本の若者たち プレーン出版